

## 赤須賀の漁村からはじめる絆づくり

赤須賀漁業協同組合 青壮年研究会  
松崎 勇

### 1. 地域の概要

赤須賀は三重県北部の桑名市にあり、木曾三川(木曾川・長良川・揖斐川)の恵みを受け、戦国時代の昔からおよそ440年もの操業の歴史をもつ漁師町である。木曾三川の流域は5県(長野、岐阜、滋賀、愛知、三重)にまたがっており、流域内では約190万人が生活している。赤須賀はその河口部に位置している(図1)。

### 2. 漁業の概要

赤須賀漁業協同組合の組合員数は現在170名で、その大半が漁業を専業としている。主な漁業はシジミ・ハマグリ・アサリを漁獲する採貝漁業であり、このほか黒ノリ養殖とシラウオ船びき網が営まれている。平成15年度の生産金額は、貝類が7億1,000万円で、全体の約9割を占めている。このほか、黒ノリが8,600万円、シラウオが1,400万円である。

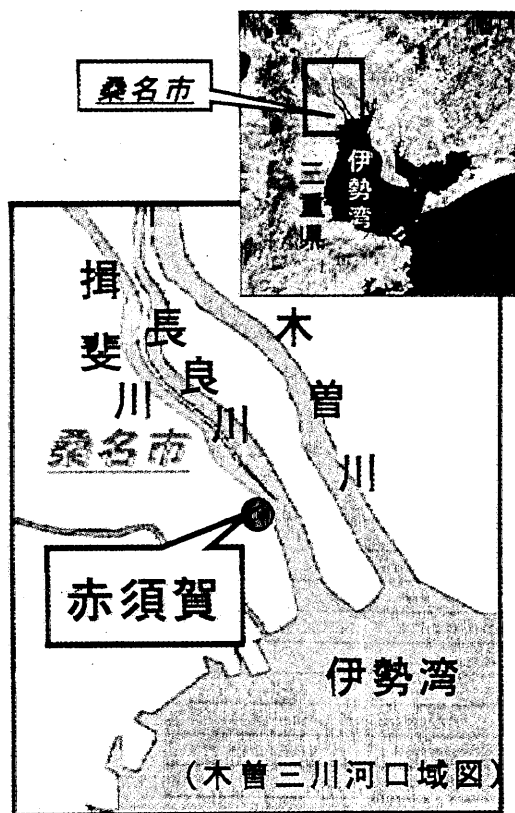


図1 赤須賀の位置図

### 3. 研究グループの組織と運営

赤須賀漁業協同組合青壮年研究会は、現在20名の会員で運営されている。昭和52年の結成以来、ハマグリ種苗生産、黒ノリ養殖技術改良試験、シジミ天然採苗試験、シラウオ人工孵化試験、漁場環境調査、資源量調査など、長年にわたり様々な研究活動を行ってきた。

### 4. 研究・実践活動課題選定の動機

私たち赤須賀の漁師は、400年以上もの昔から自然と共生しながら漁業を営んできたが、戦後の高度経済成長の中、大規模な干拓事業に伴う藻場・干潟の消失や長良川における河口堰建設など、わずかここ数十年のうちに私たちの漁場をとりまく自然環境は大きく変化した(図2)。かつて赤須賀では、貝類のみならず魚やエビなど30魚種以上を対象とした多種多様な漁業が営まれていたが、漁場環境の変化とともにこれらの漁業は衰退し、現在のように採貝漁業が中心となった

(図3)。このような状況下、シジミやハマグリなどの資源を維持するため、赤須賀では出漁日数や漁獲量の制限などの取り決めを厳守し、また、研究会活動においても種苗生産・放流等に取り組んできた。しかし、これらの努力にも関わらず漁獲量は減少を続けている(図4)。このため私たちは、将来にわたってこの赤須賀で漁業を営んでいけるのだろうかという非常に強い危機感を抱いている。

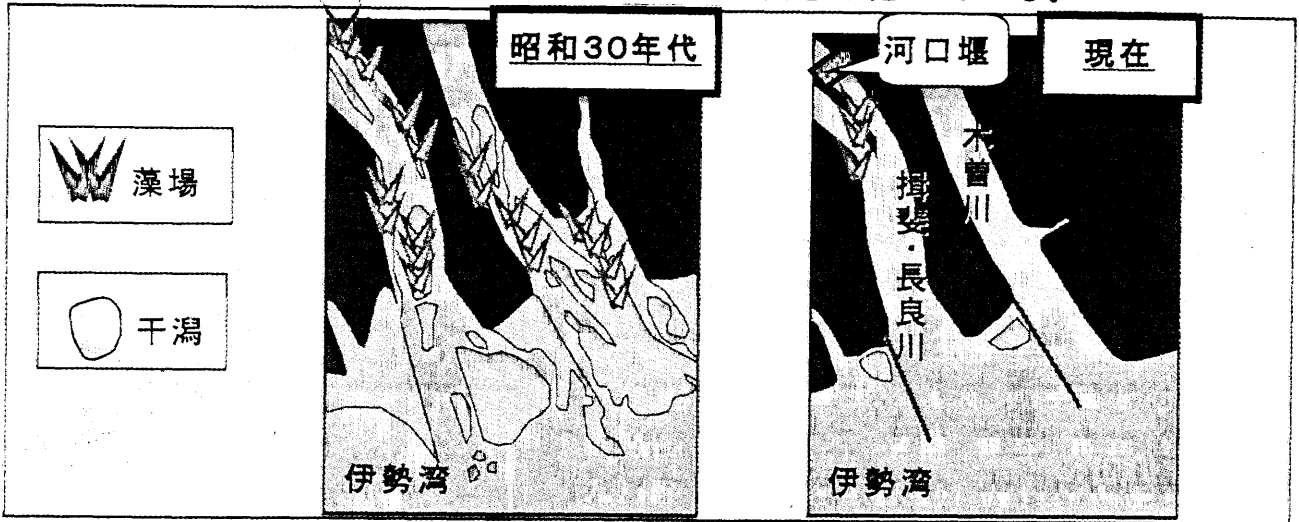


図2 木曾三川河口域における漁場環境の変化

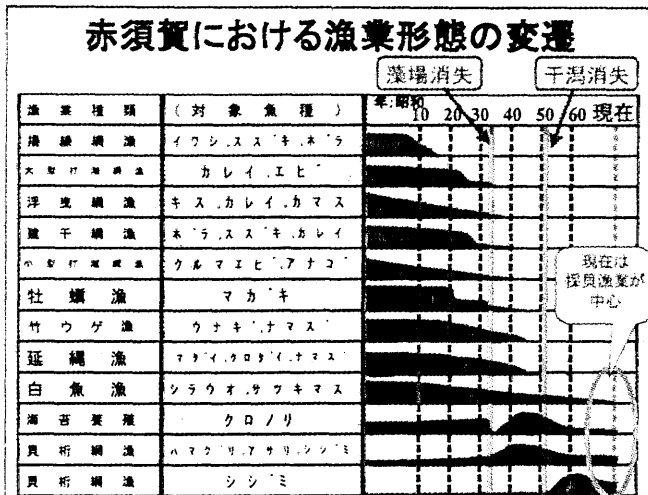


図3 赤須賀における漁業形態の変遷

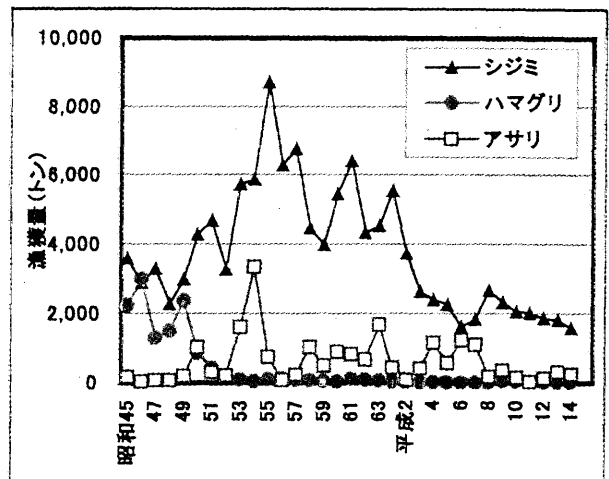


図4 赤須賀漁協における貝類の漁獲量

また、研究会が実施してきた漁場環境調査によると、夏期に伊勢湾の海底で発生した貧酸素水塊が私たちの漁場にまで遡上し、シジミの大量斃死を引き起こしていることがわかった。さらに近年では、川の上流にある森林が荒廃し、倒木が大雨の時に流木となって私たちの漁場へ大量に流れ込み、黒ノリ養殖の柵をなぎ倒してしまうなどの被害をもたらしている。

赤須賀の豊かな漁場を守り、シジミやハマグリを次の世代に残すことは私たち漁師の使命であるが、私たちの努力だけでは限界があり、陸で生活している人々の理解と協力なしでは、海で生活する私たちの漁場環境を守ることはできない。そんな思いから、私たちは地域住民と交流し赤須賀の漁村を知ってもらうことで、地域住民との「絆づくり」を目指す取り組みに力を注いできたので、以下に紹介する。

## 5. 研究・実践活動の状況及び成果（効果）

### ①地元の小学校との交流

赤須賀産シジミの味を地元の子どもたちに知ってもらうため、桑名市内の全小学校(20校)に対し、給食の食材としてシジミの配布を毎年1回行っている(写真1)。給食の前には私たち研究会員が小学校を訪問し、子どもたちに貝の採り方や漁場環境についての授業を行っている。同じ桑名市内の小学生でも、山手に住む小学生はあまり海に馴染みがなく、地元桑名でシジミが獲れることを知らない子もいるようである。子どもたちに赤須賀のシジミを味わってもらうことで、



写真1 学校給食の様子

これらを育む自然に恵まれた地元を誇りに思ってもらえればと思う。

また、実際にシジミの獲れる現場を見てもらうため、小学校からの社会見学の受け入れも積極的に行っている。桑名市内の小学校では、社会科の授業の一環として小学3年生が市内の施設を見学し地元の産業について学習しているが、以前は、赤須賀を見学先として選んでくれた小学校は年に2,3校程度であった。そこで、桑名市の教育委員会に私たち研究会の方から直接アピールしたところ、赤須賀へ見学に来てくれる小学校は増え、今年度は桑名市内の小学校全20校のうち12校、小学3年生を中心として合計770人が赤須賀を訪れてくれた(表1)。私たちは、まだこの数字に満足しておらず、桑名市内の全小学校が赤須賀を訪れてくれるよう、これからも私たちの方から働きかけていくつもりである。

月日	小学校名	受け入れ人数
8/28	城東小学校	41
9/22	精義小学校	39
10/5	日進小学校	68
10/5	大成小学校	69
10/13	大山田北小学校	50
10/13	深谷小学校	52
10/19	修徳小学校	52
10/28	星見ヶ丘小学校	122
11/9	久米小学校	106
11/18	大和小学校	30
11/18	藤が丘小学校	83
11/18	大山田東小学校	58

合計12校 のべ人数770名

表1 平成16年度の  
社会見学受け入れ実績

このほか、赤須賀の直近にある小学校とは特に親しい交流があり、研究会で取り組んでいるハマグリ種苗生産や稚貝放流の際に私たちから声を掛けて小学生に見学してもらい、地元名産であるハマグリについて学習してもらっている(写真2)。



写真2 ハマグリ稚貝放流の様子と小学生の学習レポート

## ②「赤須賀漁業まつり」の開催

毎年7月に「赤須賀漁業まつり」を開催し、都市住民との交流を図っている。シジミ汁や焼きハマグリ<sup>（注）</sup>の無料配布も行っており、まつりの日には港が2～3千人の来客で賑わう。平成12年から始め、今年度で4回目を開催した。

まつりの体験イベントとして、シジミ漁見学を行っている(写真3)。毎年たくさんの方が希望して漁船に乗ってくれる。ある年、希望者の中に車イスの方がいたことがあった。体の不自由な方を漁船に乗せるのは初めてのことであったため、どうすれば良いか少し戸惑ったが、この方を背負い、車イスから降りて漁船に乗ってもらい漁場へ案内したところ、この方は初めて船に乗れたことを大変喜んでくれた。このことがとても印象に残り、これからもできるだけ多くの人に漁場を見てもらい、交流していきたいと改めて思った。

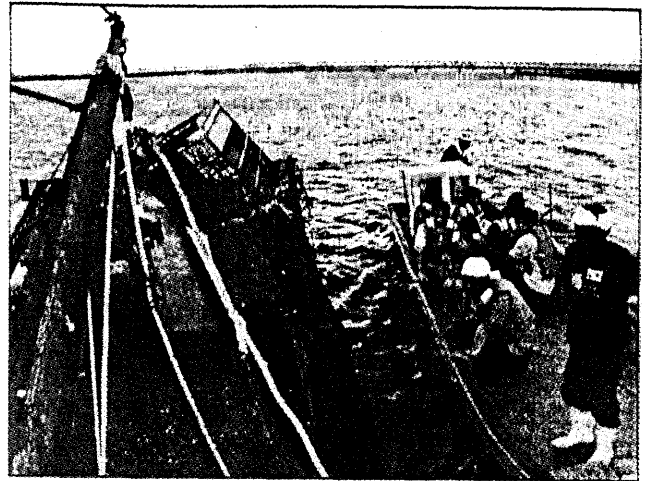


写真3 シジミ漁見学体験

## ③海と山の交流行事の開催

毎年8月に、海と山の小学生を赤須賀に招待して「干潟観察会」を開催している。この行事は、2年前に「三重県豊かな海づくり大会」が赤須賀を会場として行われることとなった際、“従来の大会とは違う市民参加型の大会を”との思いで、私たち研究会がイベントとして企画したことがきっかけで始まった。

3回目の開催となった今年度も、地元の桑名市立城東小学校4、5年生40名と、木曾川水系を通じて桑名市とつながりのある岐阜県東白川村(図5)の東白川小学校の4年生20名を、漁船に乗せて干潟へ案内し生物観察をしてもらった(写真4)。海と山という普段まったく異なる環境で生活している子どもたちが交流し、一緒になって遊ぶことで、山・川・海をつながり子どもたちに実感してもらうことが私たちのねらいである。山の小学生の中には、海で遊ぶのは初めてという子もいて、船からおそろおそろ干潟へ降りている子を何人か見かけたが、慣れてくるとみんな夢中になって砂を掘り、ハマグリを探し当てて喜んでいる姿が印象に残った(写真5)。

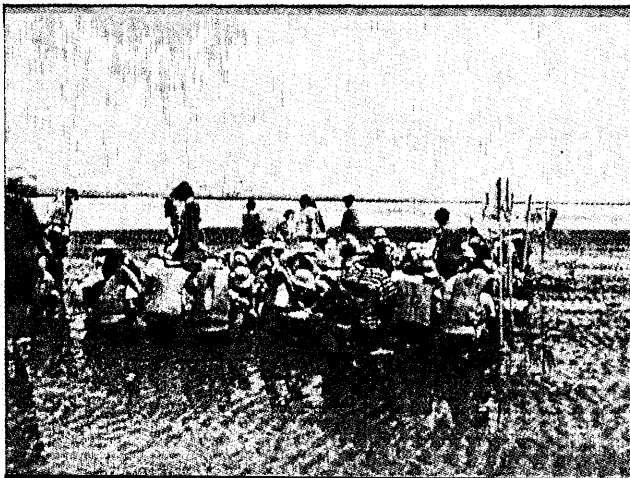


写真4 干潟観察会



写真5 「ハマグリを見つけたよ!!」

また、10月には私たちが桑名市立城東小学校の子どもたちとともに岐阜県の東白川村を訪れ、思いやりの森造成運動に参加した。8月に赤須賀で一緒に干潟観察をした城東小学校と東白川小学校の子どもたちが再会を果たし、一緒になって苗木を植えていた(写真6)。

このように、海と山で生活する者が交流し、お互いのつながりを認識することで、山・川・海の流域全体に目を向けた環境保全が実現し、海で生活する私たちの漁場環境も守られることを心から願っている。

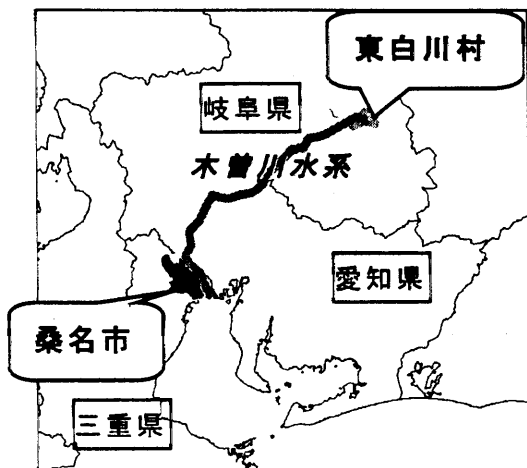


図5 東白川村の位置図



写真6 東白川村で再会した子どもたち

## 6. 波及効果

社会見学にきた小学生からはお礼の手紙が多数届き(写真7)、子ども達に赤須賀を身近に感じてもらえたことがどの手紙からも伝わってきた。赤須賀へ見学に来てくれる小学校数や、漁業まつりの来客数は年々増加しており、赤須賀へ繰り返し足を運んでくれるリピーターもでてきた。私たちの取り組みが、少しずつ地域住民に理解されつつあると実感している。

行事を開催する際には報道機関への情報提供を積極的に行ってきた。その結果、テレビや新聞で私たちの取り組みを何度も取り上げてもらうことができた(写真8)。より多くの人に赤須賀の漁村を知ってもらうため、今後も私たちの取り組みを地域に向けてPRしていきたい。



写真7 小学生からの手紙



写真8 新聞記事

また、城東小学校と東白川小学校の子どもたちの間では、赤須賀で一緒に干潟観察をしたことをきっかけに、互いの学校生活や自然環境、地元産業、まつりなどについて情報交換をする等の交流が行われるようになった(写真9)。このように、私たちの取り組みが、漁業や海に対する理解の啓発にとどまらず、地域の人々の交流を広げるものになっていることを大変嬉しく思う。

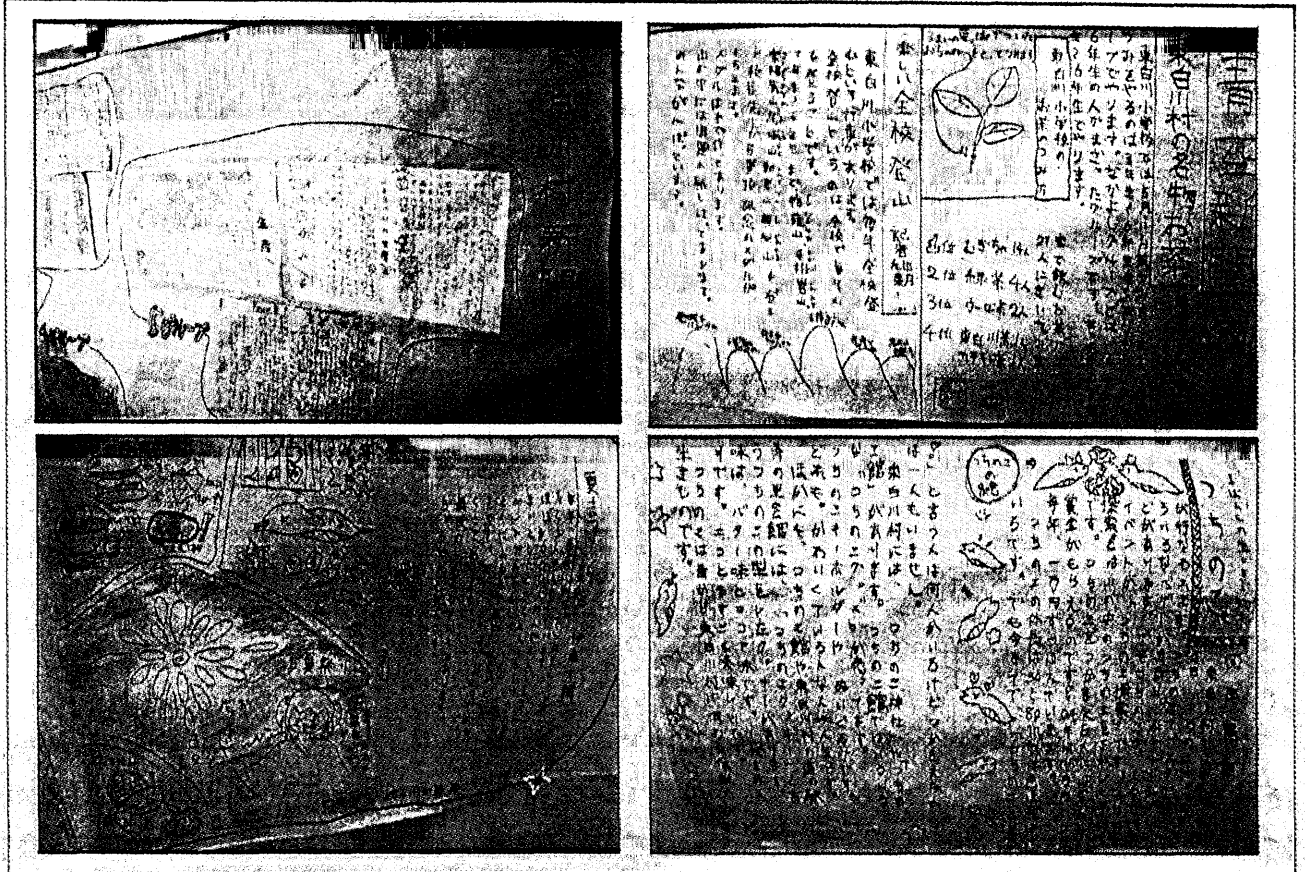


写真9 東白川小学校から城東小学校へ送られた「東白川村新聞」とその記事

## 7. 今後の課題や計画と問題点

それぞれ異なる環境で生活する「漁村・山村・都市」の人々が交流し、互いのつながりに気づくことによって「地域の絆」が生まれ、この「絆」こそが、互いが共生できる地域づくりの原動力になると考えている。ひとつひとつの交流は小さなものであるが、多くの人に赤須賀を訪れてもらうことによって赤須賀の漁村から心の交流が広がり、やがては地域を結びつける強い「絆」となることを信じて、私たち研究会はこれからも取り組みを地道に継続していきたい。

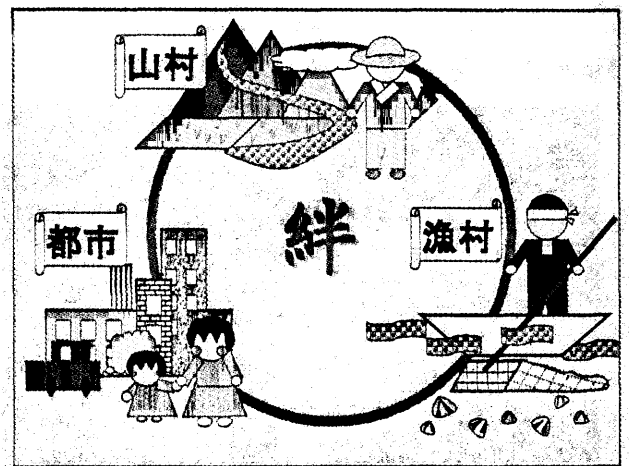


図6 「地域の絆づくり」